

ソーシャルワーク・リサーチのプロセス “データ収集・分析、論文の作成と発表”

－博士論文を例とした SPSS 操作－

目次

- 資料 1 古谷野亘 (2011) よい論文 -量的研究の場合- 第 18 巻第 1 号 71-78
- 資料 2 アメリカ心理学会 (APA) 訳：江藤裕之 前田樹海 田中建彦 (2004) 「APA 論文作成マニュアル」
医学書院
- 資料 3 アメリカ心理学会 (APA) 訳：前田樹海 江藤裕之 (2011) 「APA 論文作成マニュアル 第 2 版」
医学書院
- 資料 4 アメリカ心理学会 (APA) 訳：前田樹海 江藤裕之 (2023) 「APA 論文作成マニュアル 第 3 版」
医学書院
- 資料 5 北島英治 (2012) 2011 年度学界回顧と展望 ソーシャルワーク部門 ―ソーシャルワーク実践の理論
発見と理論の検証― 社会福祉学第 53 巻第 3 号 140-159
- 資料 6 J.W.クレスウェル V.L.プラノクラーク 訳：大谷順子 (2012) 「人間科学のための混合研究法 質的・量
的アプローチをつなぐ研究デザイン」北大路書房
- 資料 7 堀米史一 (2015) 学位論文 介護老人福祉施設におけるリスクマネジメントと転倒の発生要因・事故
防止策・活動参加の取組みに関する研究

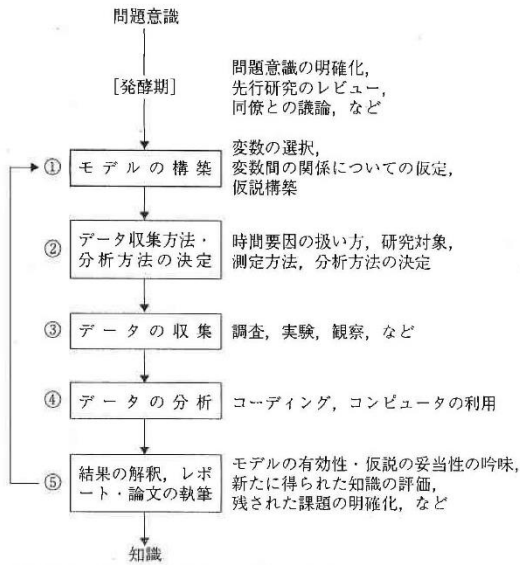
資料 1

古谷野亘 (2011) よい論文 -量的研究の場合- 介護福祉学 第 18 巻第 1 号 71-78 から引用

はじめに

研究とよばれる人の営みがある。自分で用意した課題に自分で答えるという共通点はあるが、奨学生の自由研究から巨大な実験装置を使う核物理学の研究まで、その水準と規模はさまざまである。そのような研究のうち専門家が行う研究は、人類共有の知識のストックを増大させるという壮大な企ての一部である。

研究は、ふつう漠然とした問題意識や関心をもつことに始まり、結果の公表をもって終わる。ほとんどの場合、公表されるのは研究の途中で得られた中間の結果であるにすぎない。



(古谷野亘, 長田久雄: 実証研究の手引き; 調査と実験のすすめ方・まとめ方. 11, ワールドプランニング, 東京, 1992)

図1 研究のプロセス

IV. よいモデルをつくるには

適切なモデルをえるためには、その現象を熟知し、関連する先行研究を精査し、ある程度の洞察を得られるようになっていなければならない。そこで、「知らないことについては調査も研究もできない」ということになる。ただし、この段階での知識はあくまでも仮説であるから、この仮説を実際のデータによって検証していく必要がある。それが実証研究である。その意味で、実証研究はすべて仮説検証型の研究であり、とくに“よい研究”はそうでなければならない。

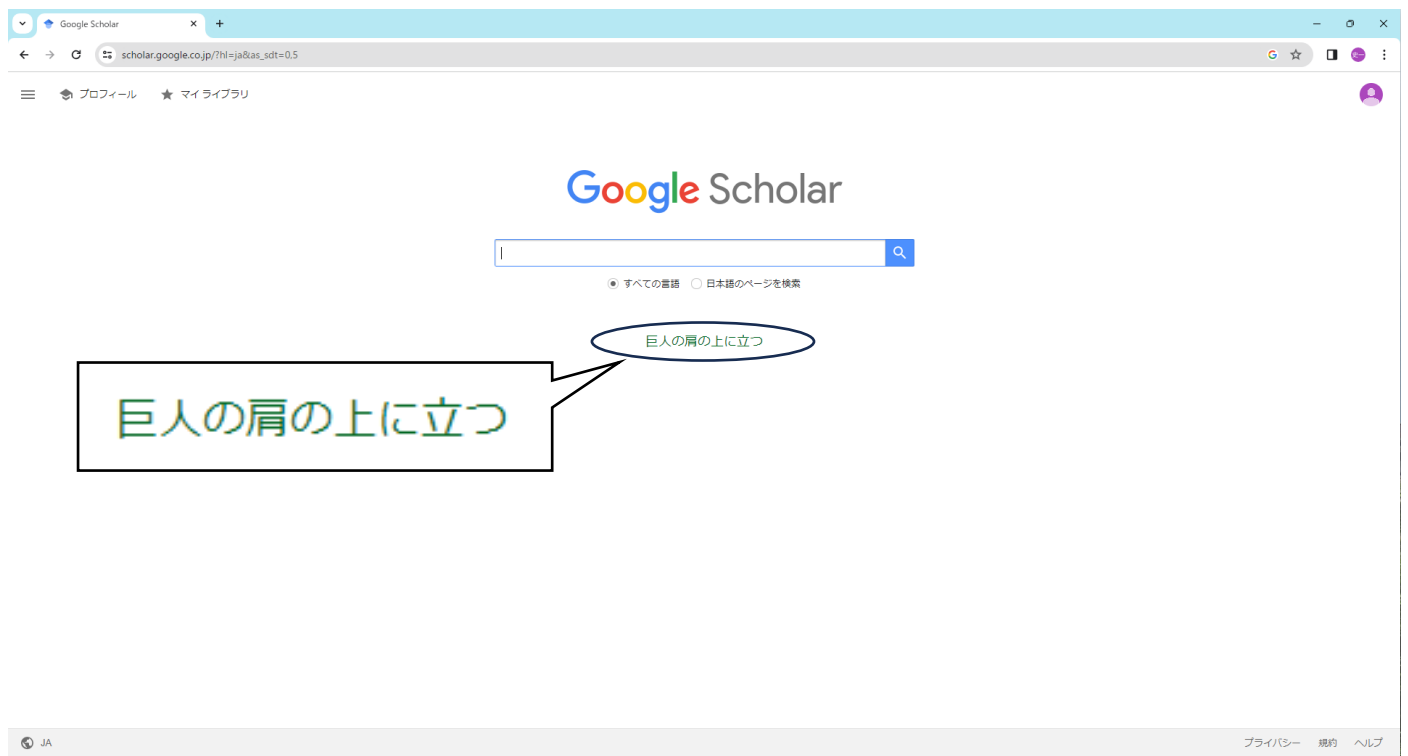
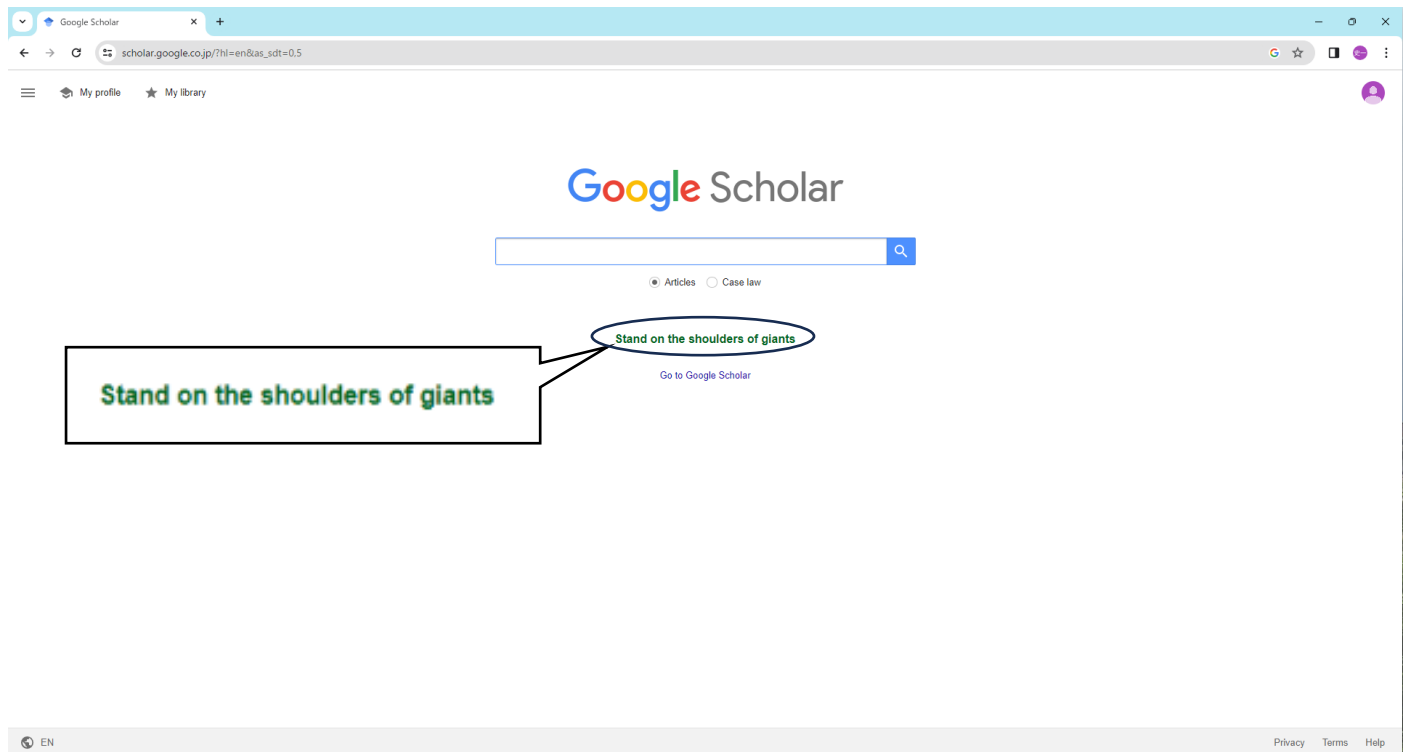
モデルはそれまでの知識をもとに組み立てられるものであるから、当然そこには先行研究の知見が反映されていなければならないし、さらにいくつかの新しい仮説が含まれているはずである。モデルは、可能な限り理論的につくられなければならない。ただし、理論といっても、検証不可能な「誇大理論 (grand theory)」ではなく、取り上げるべき変数間の関係を示して仮説に基礎を与える「概念モデル」である。

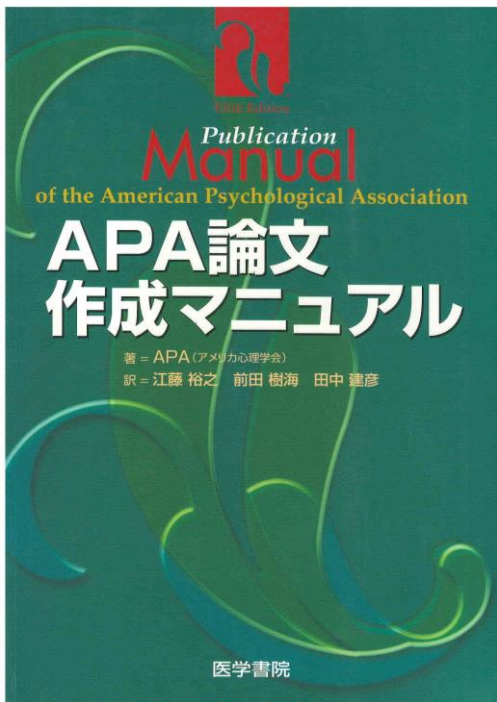
VIII.量的研究は怖くない

多くの人にとって、量的研究はどうにもとっつきにくいものようである。とっつきにくい理由ははっきりしている。何となく“数学っぽい”のである。しかし、量的研究を行うのに数学や統計学はいらぬし、自分で計算をする必要もない。パソコンの普及とソフトウェアの発達で、量的研究をまったく容易に行えるものに変えてくれたからである。パソコンとソフトを使えば技術は必要だが、分析の苦勞はほとんどない。基本的なことさえ押さえておけば、間違えることはまずないし、質的研究の場合のように初心者とベテランの差が顕著に表れることはまずない。

そのような量的研究を“よい研究”にしていくためには、最低限の知識・技術に加えて、特にモデルの構築の場面でのセンスが必要である。技術を習得するのもセンスを磨くのも、もっとも簡単かつ確実な方法は、怖がったり億劫がったりせずに、とにかくやってみることである。

Google Scholar を見ても

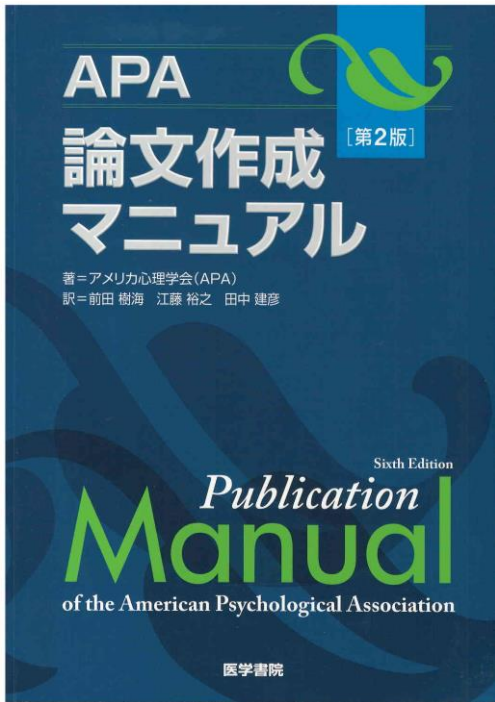




APA 論文作成マニュアル
著：アメリカ心理学会（APA）
訳：江藤裕之 前田樹海 田中建彦
発行：2004年7月

目次

はじめに	3
序	7
第1章 論文原稿の内容と構成	1
研究内容のクオリティ	2
1.01 研究デザインと研究報告	2
1.02 内容評価	3
掲載論文(Articles)の特徴	3
1.03 著作権(Authorship)	3
1.04 掲載論文の種類	4
1.05 論文の長さ、長出し、文の罫子	6
投稿原稿の構成	7
1.06 標題ページ	7
1.07 アブストラクト(Abstract)	9
1.08 序文(Introduction)	11
1.09 方法(Method)	13
1.10 結果(Results)	16
1.11 考察(Discussion)	21
1.12 複数の実験	21
1.13 リファレンス(引用文献, Reference)	22
1.14 付録(Appendix)	23
1.15 著者注(Author Note)	23
表現・提示の質的チェック	23



APA 論文作成マニュアル 第2版
 著：アメリカ心理学会（APA）
 訳：前田樹海 江藤裕之
 発行：2011年3月

目次

まえがき..... iii
 はじめに..... v
 序..... ix
 編集スタッフ/改訂委員/改訂ワーキンググループ..... xiv

第1章 論文執筆にあたって..... 1

論文の種類 1
 1.01 実証研究 2
 1.02 文献レビュー 2
 1.03 理論論文 2
 1.04 方法論論文 3
 1.05 ケーススタディ 3
 1.06 その他の論文 3

論文発表の倫理基準と法的基準 4
 科学的知識の正確さの保証 4
 1.07 研究報告における倫理 4
 1.08 データの保存と共有 5
 1.09 データの二重出版と断片的出版 5
 1.10 剽窃と自己剽窃 8
 研究参加者の権利の擁護 9
 1.11 研究参加者の権利と秘密保持 9
 1.12 利益相反 10
 知的財産権の保護 11
 1.13 著者 11
 1.14 著読者 13

xv

目次

1.15 未発表論文の著作権 13
 1.16 倫理的配慮 14

第2章 論文原稿の構成と内容..... 15

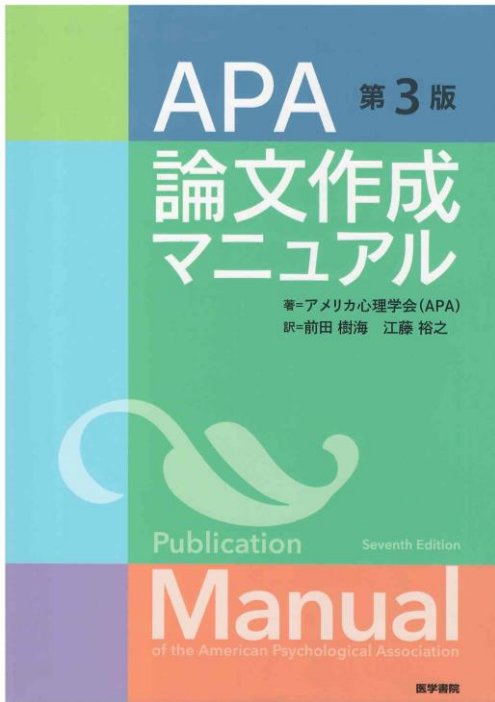
学術論文報告基準 15
 論文を構成する各セクション 17

2.01 タイトル 17
 2.02 著者の氏名と所属 18
 2.03 著者注 19
 2.04 アブストラクト 20
 2.05 序文 22
 2.06 方法 24
 2.07 結果 28
 2.08 考察 31
 2.09 複数の実践 32
 2.10 メタアナリシス 33
 2.11 リファレンス 33
 2.12 脚注 34
 2.13 付録、およびオンライン補足資料 35
 論文原稿のサンプル 37

第3章 文章を簡潔・明確に書く技術..... 57

論文の構成 57
 3.01 論文の長さ 57
 3.02 見出しによる内容整理 58
 3.03 見出しのレベル 58
 3.04 並列化(セリエーション) 60
 文章スタイル 61
 3.05 一貫した論旨の表現 61
 3.06 表現のなめらかさ 62
 3.07 文の調子 64
 3.08 無駄のない表現 64
 3.09 正確さと明晰さ 65
 3.10 修辭的技巧 68
 3.11 文章スタイルの改善手法 69
 偏見のない文章表現 69
 偏見のない文章表現のための基本的ガイドライン 70

xvii



APA 論文作成マニュアル 第3版

著：アメリカ心理学会 (APA)

訳：前田樹海 江藤裕之

発行：2023年2月

目次

謝辞	iii
はじめに	v
編集スタッフ/協力者一覧	xi

第1章 学術論文の執筆と出版の基礎知識 1

論文の種類	2
1.1 量的研究論文	2
1.2 質的研究論文	3
1.3 ミックスメソッド論文	4
1.4 述評研究論文	4
1.5 量的、および質的メタアナリシス	5
1.6 文献レビュー論文	6
1.7 述評論文	7
1.8 方法論論文	7
1.9 その他の論文	7
1.10 課題レポート、学位論文	7
論文発表の倫理基準、法的基準、および専門職としての職業基準	9
科学的知見の正確性の保証	10
1.11 研究倫理遵守に向けたプランニング	10
1.12 研究結果の倫理的で正確な報告	11
1.13 出版後の紙面の訂正、論文の撤回	12
1.14 データの保存と共有	12
1.15 質的研究のデータ共有に関する追加の検討事項	15
1.16 データの二重出版と分別出版	17
1.17 剽窃(盗用)と自己剽窃(自己盗用)	20
研究参加者、および被験者の権利と福祉の保護	21
1.18 研究参加者、および被験者の権利と福祉	21
1.19 守秘義務	22
1.20 利益相反	23
知的財産権の保護	24
1.21 出版物の著者の資格	24

xiv 目次

1.22 著者の順位	25
1.23 査読期間中の著者の知的所有権	26
1.24 未発表原稿の著者の著作権	26
1.25 論文執筆のための検閲チェックリスト	27

第2章 論文原稿の構成と書式 29

論文に必要な項目	29
2.1 ジャーナルに投稿する論文	29
2.2 学生の課題エッセイなど	30
論文を構成する各項目	30
2.3 タイトルページ	30
2.4 論文のタイトル	32
2.5 著者の氏名	33
2.6 著者の所属先	34
2.7 著者注	36
2.8 ランニングヘッド	38
2.9 アブストラクト	39
2.10 キーワード	40
2.11 本文	40
2.12 引用文献リスト	41
2.13 脚注	41
2.14 付録	42
2.15 オンライン補足資料	44
書式	45
2.16 書式の重要性	45
2.17 ページの順番	45
2.18 ヘッダー	46
2.19 フォント	46
2.20 特殊文字	47
2.21 行間(行ピッチ)	47
2.22 余白	48
2.23 段落の配置	48
2.24 段落のインデント	48
2.25 論文の長さ	49

資料 5

北島英治 (2012) 2011 年度学界回顧と展望 ソーシャルワーク部門 —ソーシャルワーク実践の理論発見と理論の検証— 社会福祉学第 53 巻第 3 号 140-159 から引用

3. 「理論の検証 (Verifying theory)」と「理論の発見 (Generating theory)」

自然に関する研究 (study/research) は、自然の「理論の発見 (Verifying theory)」と「理論の検証 (Generating theory)」の相互循環によって発展してきた。たとえば、ガリレオの時代は、地球を中心として世界が回っているとする理論としての“天動説”が信じられた。その後、その理論が覆され“地動説”という理論に取って変わられるようになった。現在では天動説の理論が正しいと思う者はいない。だれもが地動説の理論が正しいと思っている。近代に入り、自然に対する「理論の発見」と、特に自然観察の機器の発展と、実験器具の開発により、「理論の検証」の方法が飛躍的に発展し、自然科学発展の時代を迎えることになった。たとえば、ニュートンの「重力理論の発見」やアインシュタインの「相対性理論の発見」があり、その後、それらの「理論の検証」のための観察と実験による大々的な研究が行われるようになってきた。理論の「発見」と「検証」の相互循環によって、自然科学は発展してきた。

IV. おわりに

以上の議論は、主に「科学」としての“研究”について、モダンを軸足においた議論であった。ポスト・モダンとしての考え方では、また異なった議論展開になるかもしれない。先述した Oktay (2012 年) は、『ソーシャルワーク・リサーチにおけるグラウンデッド・セオリー』を 3 つの理念型 (“Ideal Type”) に分けて説明している。たとえば、コンストラクティビストとの関連等も議論していくことは今後の課題でもあり、ソーシャルワーク部門における学界においても今後の展望ともなろう。

ただし、「理論の発見」と「理論の検証」は手に手をとって、研究が行われており、これからのソーシャルワーク実践の研究の発展は、この両者の相互関連によって行われていくことになるであろう。時代によって、その強調点がどちらかに偏るようなことがあるかもしれない。しかしながら、たとえモダン、あるいはポスト・モダンと呼ばれる時代においても、その両者の重要性はかわることはないであろうし、普遍的な研究方法なのであろう。ソーシャルワーク学界においても、ソーシャルワーク実践における「理論の発見」と「理論の検証」という、この両者の調和をこれからも大切にしていける必要があるのではないであろうか。

本文は[こちら](#)から (ソーシャルワーク研究会第 12 回公開 ZOOM ミーティング資料)

私は北島先生が…

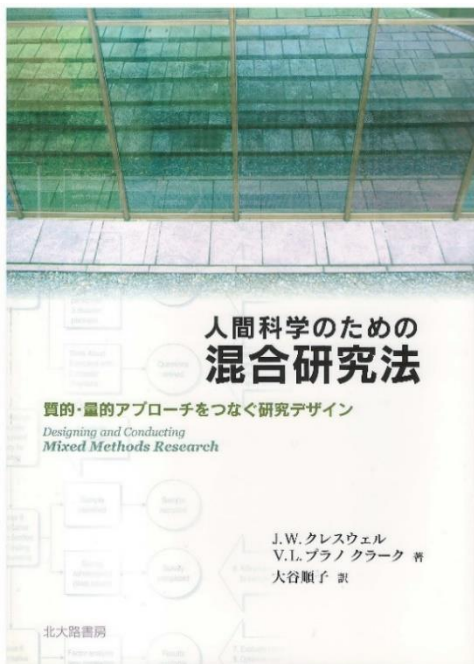
理論の発見 ⇒ 仮説生成 (型研究)

理論の検証 ⇒ 仮説検証 (型研究) について言及し、両方の調和が必要だと言っていると理解した。

当てはめてみると

「仮説生成型研究」と「仮説検証型研究」は手に手を取って、研究が行われており、これからのソーシャルワーク実践の研究の発展は、この両者の相互関連によって行われていくことになるであろう。

資料 6



人間科学のための混合研究法
質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン 第3版
著：J.W.クレスウェル V.L.プラノクラーク
訳：大谷順子
発行：2012年7月

目次

第3章
混合研究法を見つけ、レビューする..... 43

混合研究法を探し、レビューする 44
検索用語を使用する 44
この研究は混合研究法か? 45

混合研究法表記システムと視覚的ダイアグラム 46

混合研究法の4例 47
研究A 問題理解のための量的および質的データの同時収集 50
研究B 実験における質的データの使用 51
研究C 質的データによる量的調査結果説明 54
研究D 量的手段(調査票)開発のための質的探究 56
サンプル研究の類似点と相違点 59

要約 63
演習 63
さらに学びたい人のためのおすすめ文献 63

第4章
混合研究法を用いた調査研究デザインを選択する..... 65

混合研究法デザインの分類 66
混合研究法デザインの4つのおもなタイプ 66
トライアングレーションデザイン 69
埋め込みデザイン 74
説明的デザイン 79
探究的デザイン 83

混合研究法デザインのタイプを選択する 87
タイミングを決める 88
重み (weight) をおく決定 89
混合の (mix) 決定 91

デザインの決定を実施する 92
調査研究のデザインを同定するパラグラフを書く 95

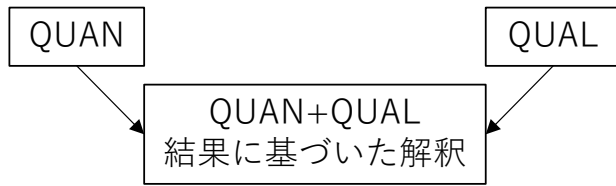
要約 96
演習 96
さらに学びたい人のためのおすすめ文献 96

第5章
混合研究法を紹介する..... 99

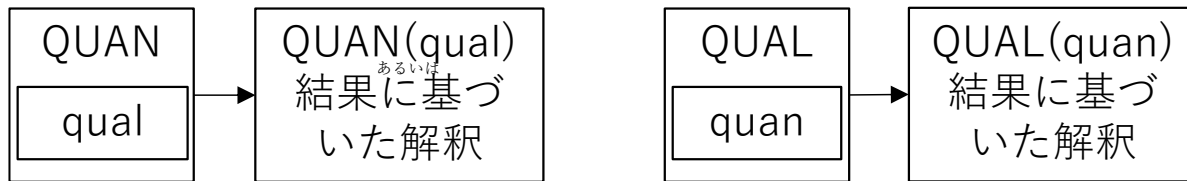
混合研究法の研究題目を書く 100

vi

● (a) トライアングレーションデザイン

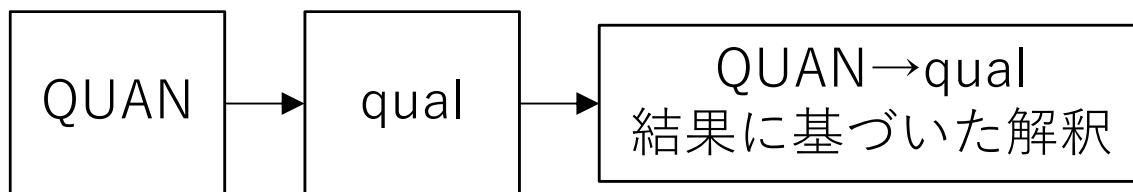


● (a) 埋め込みデザイン



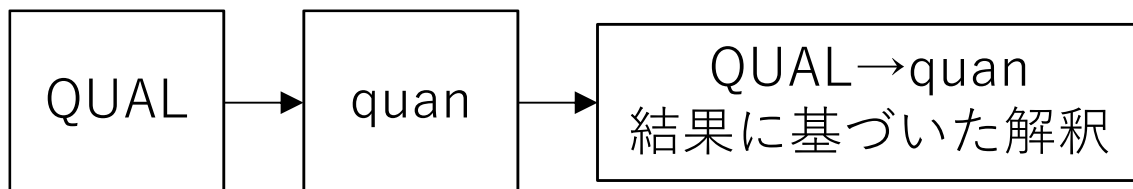
● (a) 説明的デザイン

質的データははじめの量的結果を説明するか、あるいはその上に構築することに役立つ。



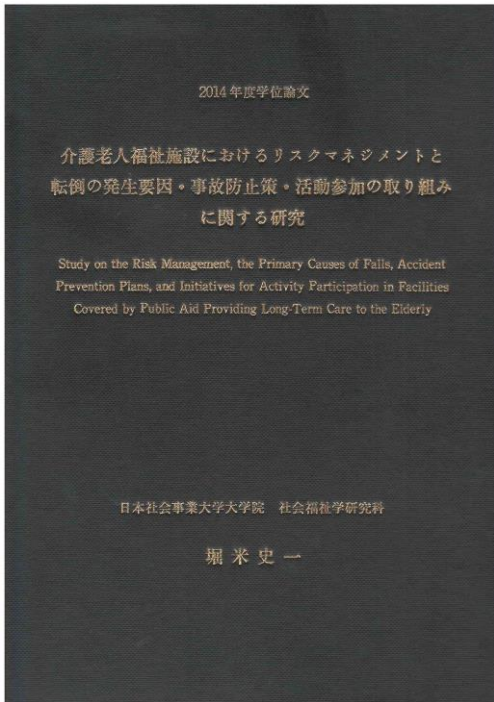
● (a) 探求的デザイン

第1の研究手法(質的)の結果が第2の研究手法(量的)に進展するのを助け、情報提供を行う。



資料 7

堀米史一 (2015) 学位論文 介護老人福祉施設におけるリスクマネジメントと転倒の発生要因・事故防止策・活動参加の取組みに関する研究



目次

序章 本論文の背景と目的	1
1. 本論文の背景にあるリスクマネジメントの実態	1
2. 問題意識と本論文の目的	2
3. 本論文の構成	3
第1章 介護サービスにおける「介護事故」「インシデント」に関する先行研究の検討	5
1. 定義に関する先行研究	5
1) リスクとリスクマネジメントの定義に関する先行研究	5
2) 介護事故とインシデントの定義に関する先行研究	7
2. 介護事故とインシデントの発生要因に関する先行研究	11
1) 発生要因に関する先行研究	11
2) ヒューマンエラーによる介護事故・インシデントの発生	13
3) 環境要因による介護事故・インシデントの発生	15
3. 転倒の発生要因と事故防止策・活動参加に関する先行研究	15
1) 利用者要因と転倒の関連性に関する先行研究	15
2) 環境要因と転倒の関連性に関する先行研究	18
3) 服薬状況と転倒の関連性に関する先行研究	19
4) 転倒事故と事故防止策・活動参加に関する先行研究	22
4. 本研究における検討課題	23
1) 本研究におけるリスクマネジメント・介護事故・インシデントの概念的定義	23
2) 介護事故とインシデントの発生要因と事故防止策・活動参加の関連性	23
3) 本研究の課題	25
5. 本研究の意義	26
6. 質的研究と量的研究の位置づけ	26
第2章 施設職員へのインタビュー調査	28
1. 目的	28
2. 方法	28
1) 調査方法と期間	28
2) 調査対象と実施方法	28
3) 調査内容	28
4) 分析方法	29
5) 調査実施にあたっての倫理上の配慮	29
3. 結果	29
1) 調査対象者の属性	29
2) 施設におけるリスクマネジメントの取組み	30
3) 施設で想定している介護事故・インシデントの種類	31
4) 介護事故・インシデントの発生要因	32
5) 事故防止策として考えられること	35
6) 事故防止策以外で事故防止につながっていること	37
7) QOLとリスクの関係性	38
8) QOLとリスクのバランス	39
9) 施設における活動参加への取組み事例	41

目的

方法

結果①

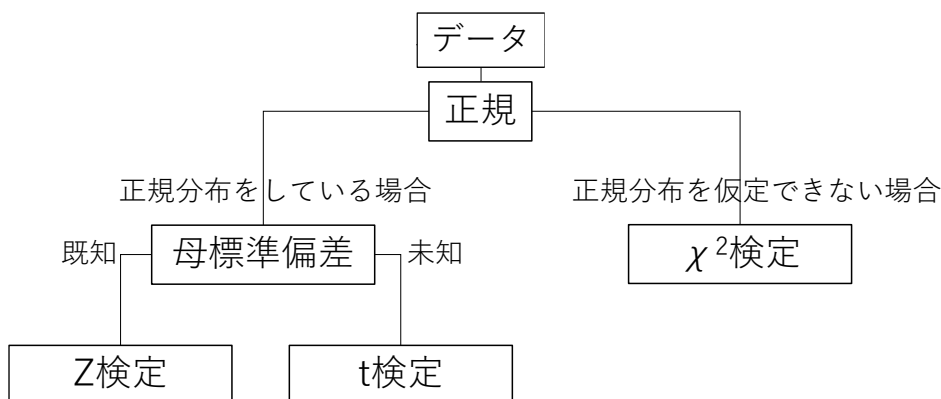
4. 考察	47
1) 施設におけるリスクマネジメントの取組み	47
2) 施設で想定している介護事故・インシデントの種類	47
3) 介護事故・インシデントの発生要因	48
4) 事故防止策として考えられること	49
5) 事故防止策以外で事故防止につながっていること	50
6) QOLとリスクの関係性	51
7) QOLとリスクのバランス	51
8) 施設における活動参加への取組み事例	52
9) 理論モデルの構築と仮説の生成	53
10) 本調査の限界	55
第3章 利用者の状況と転倒防止策に関する質問紙調査	56
1. 目的	56
2. 方法	56
1) 調査方法と期間	56
2) 調査対象と実施方法	56
3) 調査内容	56
4) 分析方法	58
5) 調査実施にあたっての倫理上の配慮	58
3. 結果	59
1) 調査対象者の属性	59
2) 転倒の有無と属性の関連性	63
3) 属性の平均値と標準偏差	66
4) 属性間の相関	66
5) 転倒の有無と属性の多重共線性	67
6) 転倒予測要因の調整オッズ比	68
7) 転倒と転倒原因の拡大の関連性	72
4. 考察	73
1) 対象者の基本属性	73
2) 作業仮説 (1) について	75
3) 作業仮説 (2) について	76
4) 作業仮説 (3) について	77
5) 作業仮説 (4) について	77
6) 本調査の限界	78
第4章 総合考察・結論	80
1. 総合考察	80
1) 理論モデルの構築と仮説の生成	80
2) 作業仮説の検証	81
3) 理論モデルにおける要因間の作用	87
4) 介護老人福祉施設における転倒防止と利用者の生活の質の向上に関する考察	88
2. 本論文の限界と課題	91
3. 結論	92

結果②

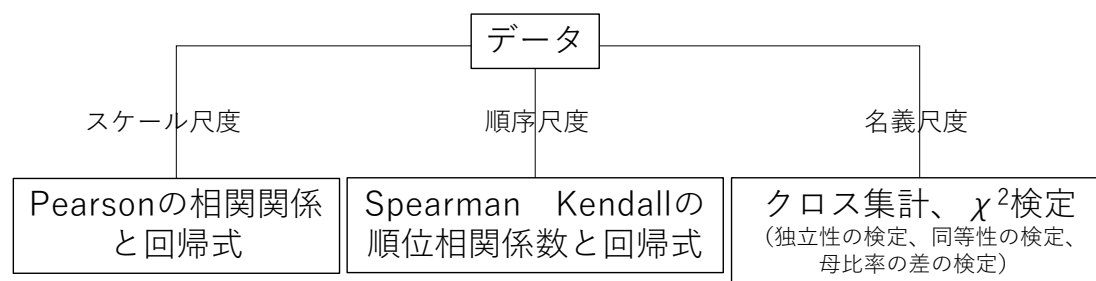
考察

分析方法の選び方の一例

① 母平均と標本平均の比較

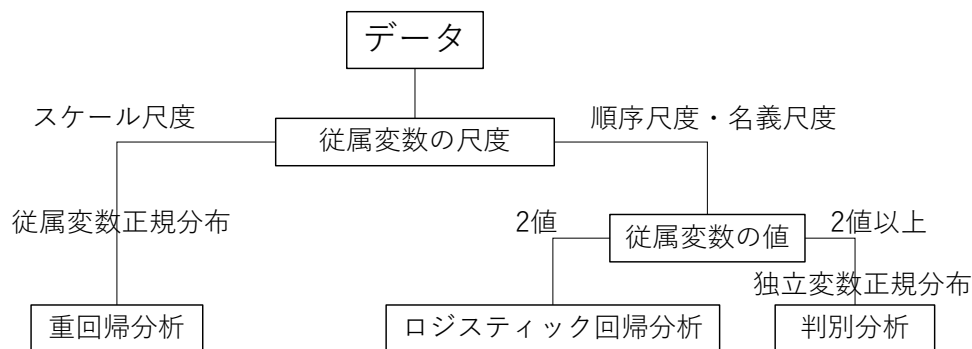


② 2変量の間係を調べる



※①と②は[第45回 SW 研究会資料](#)参照

③ 多変量解析



※1 従属変数については[第48回 SW 研究会資料](#)を参照

※2 重回帰分析については[第55回 SW 研究会資料](#)を参照

ロジスティック回帰分析

なぜロジスティック回帰分析なのか？→ロジット関数を使うから

ロジット関数

$$\text{logit}(p) = \log\left(\frac{p}{1-p}\right) = \log(p) - \log(1-p) \quad \leftarrow \text{全く覚える必要なし}$$

もともと疫学研究において複数個存在する「リスクファクター」を検討するために用いられた。

回帰分析との違いは線形回帰分析は従属変数が「量的変数」なのに対して、ロジスティック回帰分析は目的変数（従属変数）が質的変数（2値変数で、例として賛成、反対、転倒あり、転倒なし）で説明変数（独立変数）は連続値でも名義変数でも大丈夫というところ。さらに係数として①オッズ比を求めることができ、解釈が容易である、②各対象者につき、自傷の起こる確率を求められることが挙げられる。

欠点としてはモデル構築の判定基準が数種類あり、これを基準にすれば最適な結果が得られると断言できない。